屋内高床部を持つ竪穴式住居跡について
―近畿地方の事例から―

岸岡貴英

1．はじめに

弥生時代から古墳時代の住居の床面利用のありかたは実にさまざまであり、その平面プランと主柱穴に規制されつつ、部分遺構としての炉・中央穴・排水溝・間仕切り溝・貯蔵穴・高床部などが複雑に絡み合いつつ変遷をとげている。屋内高床部についても、近畿地方においてはおおまかにその分布域とひろがりはおさえられているが、近年の発掘調査の増加により、資料も増えつつあり、さらに類似する遺構やわずかな段状を呈するものの存在もその状況を複雑にしつつある。このような状況のなかで資料の集成を行い、かつ明確な定義と分類およびその意味をあきらかにする必要があろう。

近畿地方における屋内高床部をもつ竪穴式住居跡は、縄文時代から奈良時代まで存在し、かつその形状は多様である。量的にみれば、弥生時代後期後半から古墳時代前期を盛行期とし、それ以前を出現期、それ以降を衰退期ととらえることができる。今回はその盛行期の様相とその意味をあきらにするために、縄文時代から古墳時代前期までの資料を分析した。なお、屋内高床部については、ベット状遺構とも呼ばれているが、形態的な意味を重視して、前者で統一した。

2．研究小史と問題点

屋内高床部の研究史については、西岡氏により総括整理されており[注1]、詳細な研究史は省略するが、その分布および変遷と屋内高床部をもつ住居の評価に関する主要な論攷をとりあげて、後に問題点を提示した。

まづ変遷については、寺井氏が、西日本規模で各拠点的な集落において高床部をもつ住居の比率をあきらかにされており、ある一定の傾向をみることができる[注2]。またその変遷がゆるやかでかつ地理的な勾配をみることができるとしており、その変遷過程のモデルを提示している点は参考となる。

また関　晴彦氏は、北部九州における竪穴式住居跡の高床部の設置状況を総括して、そ

れが連続的に構造変化をたどることができるとしている。[注3] つまり、弥生時代中期中葉の宝台遺跡Ｂ区第１号住居跡では、高床部が住居外区を全周する設置形態を示すが、後期前葉～中葉にかけては住居の短辺に、庄内～布留期にかけては、「Ｌ」字状に設置され、その後「コ」の字状にかわるとされている。

さらに、吉野ヶ里遺跡の報告では、遺跡における竪穴式住居跡の変遷が示されており、弥生前期から終末期までその変遷をおうことができる。[注4] 屋内高床部は中期後半に出現しており、２本柱の隅丸長方形住居の壁際に１箇所の高床部が設置されている。また後期前葉から中葉にかけては、多数の住居内高床部がみられ、住居内壁際の高床部がさまざまな位置に配置されている様子がうかがえる。集落内における変遷状況をとらえられる典型的な遺跡であり、一つの指標となろう。

一方松下勝氏は―『播磨における弥生文化』―のなかで、[注5] 東溝遺跡・名古山遺跡の成果から、「住居跡内における屋内高床部をもつ施設は弥生時代中期後半にはじまる」とし、かつ縄文時代晩期の高床部の例をあげて、「直接の系譜をひくのかどうかはまだわからないが、いずれにしても、屋内高床部は播磨地方で出現した可能性が強い」として近畿における出現を示唆している。

ところで高床部をもつ住居については、これまでさまざまな評価がなされてきた。熊野正也氏は、その住居の特異性に注目し、[注6] 沢田大多郎氏は階層に言及し、[注7] 河野眞一郎氏はシャーマンの可能性を指摘している。[注8] このような考えに対し、石野博信氏は「高床部を持つ住居の歴史的規定はできない」とし、[注9] 屋内高床部が屋内区分利用のための一施設という観点については構造物として敷設することを重視し、それを文化現象の一部としてとらえるとしている。

また関氏は北部九州における集落ごとの設置形態を分析し、その設置形態が示す現象は集落間の限られた有機的な関係を反映したものとして解釈している。[注10] このような集落ごとの比較検討という視点は今後の研究の上で重要である。

さらに播磨大中遺跡の報告では、[注11] 屋内高床部をもつ住居について、その画一性および企画的統一性の意義を重要視し、いわゆる室岡型住居と類似した形態のものが検出されているところから、住居型はある集団の領域とその移動を示す資料として、住居型と集団の密接な関係を示唆している。

一方で笹森健一氏は、高床部を寝所と規定したうえで、東西の文化現象の内容の違いを指摘している。[注12] 氏はまず西日本の屋内高床部をもつ住居の内、屋内高床部の設置形態から大型住居（多角形住居など）と長方形２本柱の住居の２類型を取上げた。そして、魏志倭人伝を引用しつつ、後者については「高床部の配置は各住居の類別概念であって寝床の場は、[注13]

使う人が決定されていたのである」とし、前者については、高床部が全周して寝床の場は区分されないと両者の違いを指摘している。

一方東日本については、高床部がみられる大型住居と中規模の住居に高床部の設置状況から区別がみられず、さらに西日本の大型住居と違い寝床の場の性格が固定されていたとしている。そして高床部の効果を人の固定による区分と性格付している。

以上のような研究の動向を整理してみると、その変遷と機能論の検討から住居形態論や集落論に及んでいるのであるが、そこにはいくつかの問題点が存在するように思われる。

第一に把握されるべき前提としての高床部の設置形態の変遷は、地域ごと、集落ごとにおさえられているのであるが、高床部に付与された機能については、棚・物置き・祭壇的な性格のものや、寝台的な性格のものおよび屋内区分的な性格の強いものまでさまざまであり、それらをすべて高床部という属性のみで変遷をとらえるまえに、やはりその設置形態と設置状況の明瞭な把握がまず第一に必要であろう。

次に住居における屋内高床部の存在理由および位置付けである。これはやはり地域ごとに、屋内高床部の捉え方に相違があるようであり、地域性をふまえた上で、さまざまな視点からの検証が必要であろう。

3．集成・分布および分類について

おおくの方々のご協力を得て、管見にふれる限りの資料をあつめてみた。おそらくまだ相当数の資料の抜け落ちがあると思われるが、大まかな傾向はつかめると思われる。(注14) もちろん市町における発掘調査件数の格差など、さまざまな要因から詳細な分布論を展開することには無理があるが、近年の近畿地方全般における開発状況のあり方から、一応旧国単位の地域ごとに一定の傾向をみていくことはできると考える。

また、時期については、前述のとおり古墳時代前期までのいわゆる須恵器出現以前の段階までを対象とし、報告書の記載にできるだけ忠実に従った。

分類についてはこれまでさまざまな方が分類案を提示されてきている。熊野正也氏(注15)、河野眞一郎氏(注16)、西岡誠二氏(注17)の案が代表的なものであるが、近年では寺井誠氏(注18)や杉本源造氏(注19)の分類案がみられる。いずれも高床部を敷設する位置に注目して分類をたてておられるが、ここでは寺井誠氏の分類を参考に、若干の修正とさらなる細分作業をおこない分類案を作成した。

竪穴式住居跡の外区(住居床面において外側に当る部分)で高床部の占める面積の割合からA～Fの6つに大別し、その敷設位置とその形態から細別をおこなった。A類は外区に占める面積が1/9前後の比率を示す高床部からなる。B類は外区に占める面積が1/3以下の

比率を示す高床部からなる。Ｃ類は外区に占める面積が1/3～1/2前後の比率を示す高床部からなる。Ｄ類は外区に占める面積が1/2～3/4前後の比率を示す高床部からなる。Ｅ類は外区に占める面積が3/4～9/10前後の比率を示す高床部からなる。Ｆ類は外区に占める面積が9/10以上の比率を示す高床部からなる。

このような大別点をもとに、その敷設位置と敷設形態から方形・長方形、円形、多角形と個別に細分した。なお高床部自体の幅は0.8～1.2mのものがほとんどであるが、幅約0.6m以下で屋内床面区分というよりも棚状を呈するものは数値の前に「*」記号を打ち、大別に耐えられずたとえばＤ～Ｆのどれかの類型にあてはまるものは、「ＤＦ」のように記載した。

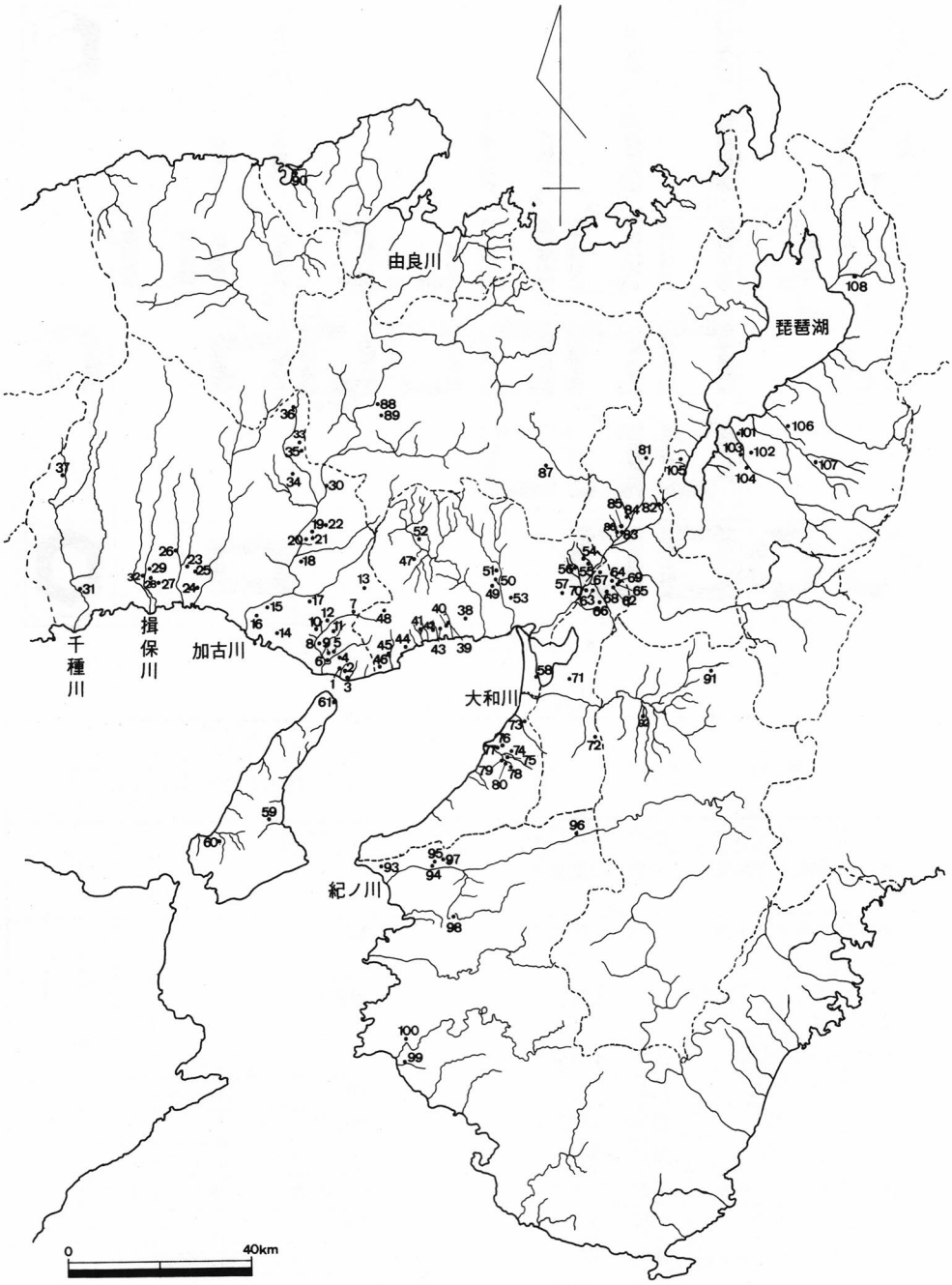
そして、高床部が内区に設置される場合は、(Ｅ２)のように記載した。また、平面プランと高床部の形態が相違する場合は、⑥Ｆ１(内区の形状が六角形を呈す)のように記載した。なお、細別不可能のものについては、例えば「Ｅ」のように細別番号を記載しないようにした。

４．屋内高床部をもつ住居の変遷

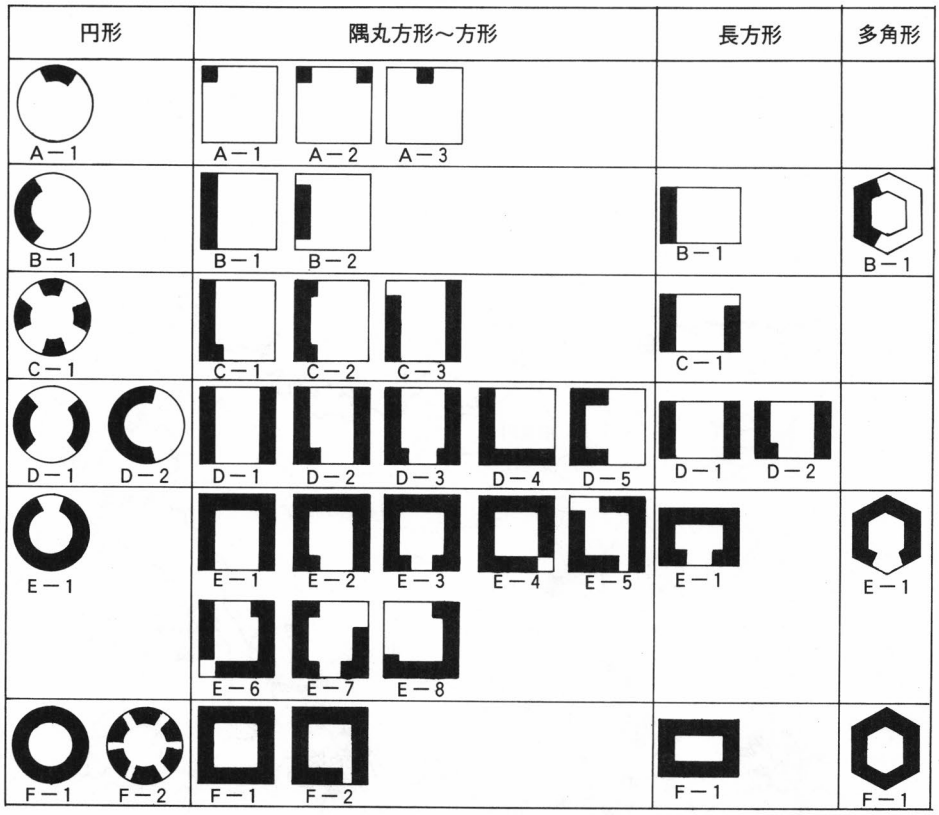
縄文時代晩期にさかのぼる資料としては、加美町市原寺ノ下遺跡の例がある。この円形住居の屋内高床部は、内区と外区の区分を反映した構造のものであるが、これ以降中期後半まで資料がなく、系譜的につながるかどうかは判断できない。中期後半の段階で高床部がみられるものには、神戸市西神38地点、神戸市鍋谷池遺跡、加古川市溝の口遺跡、姫路市名古山遺跡、姫路市六角遺跡、海南市亀川遺跡、守山市服部遺跡等があり、西播磨・東播磨・紀伊・近江等に点在してみられる。その設置形態は、いずれも円形プランの住居に、外区の1/3～3/4ほど設置されるものである。高床部の幅はまちまちであり、高床部の幅のせまい棚的なものや高床部の幅が比較的広く、主柱穴に規制されて構築されている点から、内区と外区の区分を明瞭に反映したと考えられるものがある。

後期前半の資料としては、神戸市高津橋・岡遺跡(円Ｆ２)、三田市川除・藤ノ木遺跡、春日町国領遺跡(円Ｄ１)、淡路町塩壺遺跡[注20]などがみられる。資料数との関係か、確実に後期前半と押えられる住居自体があまりみられない。

上記の４遺跡の高床部の設置形態は似通っており、円形プランの住居に幅１ｍ前後の高床部をいくつかにわけて巡らすものである。その高床部の形状から寝台的な機能を読みとることも可能であろう。これはいわゆる「分割ベット」とも呼ばれ[注21]、時期はくだるが和歌山市西田井遺跡(円Ｃ１)においても、４分割された高床部が検出されている。ちなみに神戸市高津橋・岡遺跡のものは６分割、三田市川除・藤ノ木遺跡のものは３分割以上、春日



第１図　屋内高床部を検出した集落分布図



第２図　屋内高床部の形態分類模式図

付表１　屋内高床部地名表

NO.	遺跡名	旧国名	時期	平面プラン						
				円形	方形～隅円方形	長方形	多角形			
							五	六	七	八
1	神戸市垂水区狩口台	播磨	後期後半		F1/*DE/EF					
2	神戸市垂水区高津橋・岡	播磨	後期前半	F2						
3	神戸市垂水区舞子東石ヶ谷	播磨	後期後半	F1	E2/F1/F2					
4	神戸市西区池上・口の池	播磨	庄内		EF/E3					
5	神戸市西区池上北	播磨	後期前半～後半	BF/EF	F1					
6	神戸市西区吉田南	播磨	布留中		EF					
7	神戸市西区押部	播磨	後期後半		DF					
8	神戸市西区芝崎	播磨	後期後半		EF					
9	神戸市西区玉津田中	播磨	後期後半～庄内	A1	F1/A3/DF	F1	F1			
10	神戸市西区西戸田	播磨	古墳前期		EF					
11	神戸市西区西神38地点	播磨	中期後半	*BE						
12	神戸市西区鍋谷池	播磨	中期後半	*B1						

13	神戸市北区淡河	播磨	弥生末～古墳初		F1					
14	播磨町大中	播磨	後期後半	D2/F1		D1		F1		
	播磨町大中	播磨	庄内	DE	E2/E3/F1	D1/D2		E1		
15	加古川市溝の口(東溝)	播磨	中期後半	D2						
	加古川市溝の口(東溝)	播磨	後期後半	E1/F1						
16	加古川市粟津	播磨	後期		E1					
17	三木市高男寺	播磨	後期後半		EF					
18	小野市垂井	播磨	弥生後期				F1			
19	社町家原・堂ノ元	播磨	弥生後期末	F1	F1/EF					
20	社町出水・前ヶ畑	播磨	?				F1			
21	社町社・大塚	播磨	古墳初				E3			
22	社町下三草・諏訪ノ下	播磨	弥生後期		EF					
23	姫路市名古山	播磨	中期後半	E1						
24	姫路市長越	播磨	後期後半～布留		D5/CD	C1				
25	姫路市今宿丁田	播磨	中期後半～後期	BF						
26	姫路市六角	播磨	中期後半	*BC						
27	姫路市丁・柳ヶ瀬	播磨	庄内		F1					
28	太子町立岡	播磨	?		D5/CD					
29	太子町城山	播磨	古墳前期		EF					
30	西脇市大垣内	播磨	後期中葉～庄内	⑥E1	⑥F1/E1/F1/EF					
31	赤穂市周世入相	播磨	後期後半	⑤E1⑥E1	⑥F1					
32	龍野市片吹	播磨	後期後半					E1		E1
33	中町鍛冶屋・下川	播磨	古墳前期		F1					
34	中町坂本・土井ノ内	播磨	古墳初		C3					
35	中町森本・上島原	播磨	弥生後期	BF						
36	加美町市原寺ノ下	播磨	縄文晩期	F1						
37	佐用町長尾・沖田	播磨	古墳前期		B1					
38	西宮市越水山	摂津	後期後半	BF						
	西宮市越水山	摂津	庄内		B1	CD				
39	芦屋市三条九ノ坪	摂津	古墳前期		EF					
40	芦屋市月若	摂津	布留？		EF					
41	神戸市灘区篠原	摂津	後期後半	B1						
42	神戸市東灘区郡家（城の前）	摂津	弥生後期		DF					
43	神戸市東灘区本山北	摂津	後期終末～古墳初		EF					
44	神戸市中央区日暮	摂津	布留古		EF					
45	神戸市長田区長田神社境内	摂津	後期後半～庄内	A1/B1/DF	EF			DF		
46	神戸市須磨区戎町	摂津	庄内			D1				
47	神戸市北区宅原(有井)	摂津	古墳前半		DF			EF		
	神戸市北区宅原(内垣)	摂津	弥生後期	A1	E5/F2	B1				
48	神戸市北区山田・中	摂津	庄内		D2					

49	川西市加茂	摂津	後期末～古墳前期		E1/C3/EF					
50	川西市栄根	摂津	後期後半～古墳前期		F1/EF					
51	川西市小戸	摂津	後期～古墳前期		E1/B1					
52	三田市川除・藤ノ木	摂津	後期前半	EF						
	三田市川除・藤ノ木	摂津	後期後半	D1/(方)F 1/EF	D2/F1			F1	F1	
	三田市川除・藤ノ木	摂津	庄内		E3/F1	B1/E1				
53	豊中市新免	摂津	後期中頃		DF					
54	高槻市紅茸山	摂津	後期中頃～後半		C1/C2					
55	高槻市安満	摂津	後期～布留		C2					
56	高槻市郡家川西	摂津	後期後半～布留		A1/B1/BF					
57	茨木市東奈良	摂津	弥生後期～古墳前期		E1					
58	大阪市阿倍野筋	摂津	古墳前期		E3/E8					
59	洲本市下内膳	淡路	弥生終末～古墳初		EF					
60	西淡町谷町筋	淡路	後期後半～末	④F1						
61	淡路町塩壺	淡路	後期後半	EF						
62	枚方市出屋敷	河内	後期後半～庄内		EF					
63	枚方市山之上天堂	河内	後期後半					DF		
64	枚方市田口山	河内	?		EF					
65	枚方市藤阪東	河内	後期後半		F1/EF/C					
66	枚方市茄子作	河内	?		E3					
67	枚方市九頭神	河内	後期末		F1					
68	枚方市村野	河内	古墳前期		EF					
69	枚方市長尾西	河内	後期		E1					
70	枚方市鷹塚山	河内	後期末		B1					
71	八尾市亀井北	河内	庄内新相		CD					
72	太子町伽山	河内	布留		D4					
73	堺市下田	和泉	弥生末～古墳初	E1	E3					
74	和泉市府中	和泉	弥生終末～古墳初		E1					
75	和泉市和気	和泉	庄内		F1					
76	泉大津市豊中	和泉	弥生終末～古墳初		BD					
	泉大津市豊中	和泉	古墳前期		BD/EF					
77	泉大津市古池北	和泉	弥生終末～古墳初		*D4					
78	岸和田市上フジ	和泉	後期後半～庄内	⑧EF	D4					
79	岸和田市西大路	和泉	庄内		D2					
80	岸和田市山之内	和泉	?	BF						
81	京都市植物園北	山城	布留古		F1/C1					
82	京都市中臣	山城	後期後半～布留	D2				B1		

83	京都市水垂	山城	庄内～布留		E3/F1					
84	京都市大藪	山城	後期後半		EF					
85	向日市鴨田	山城	庄内～布留		E3					
86	長岡京市神足	山城	庄内(古)		E3					
87	亀岡市千代川	丹波	古墳前期		E6/E7					
88	春日町七日市	丹波	庄内～布留中		A2/C1					
89	春日町国領	丹波	後期前半	D1						
90	久美浜町浦明	丹後	古墳前期		D3					
91	天理市和爾・森本	大和	庄内		*F1					
92	広陵町箸尾	大和	古墳前期		BE					
93	和歌山市西庄	紀伊	古墳前期		E3/EF					
94	和歌山市西田井	紀伊	後期～庄内	C1/E1/F1						
95	和歌山市北田井	紀伊	弥生後期～古墳前期		D3/E1/F1					
96	橋本市市脇	紀伊	庄内		EF					
97	岩出町吉田	紀伊	古墳前期		E3					
98	海南市亀川	紀伊	中期後半	B1						
98	海南市亀川	紀伊	後期後半		E1					
99	御坊市中村２	紀伊	弥生後期末～古墳初頭		EF					
100	御坊市東郷	紀伊	後期後半	CF						
101	守山市服部	近江	中期後半	D2/(F1)						
102	野洲町下々塚	近江	古墳初頭		B2					
103	野洲町野洲川左岸	近江	古墳初頭		B2					
104	栗東町高野	近江	古墳初頭		E4					
105	大津市滋賀里	近江	古墳初頭		(F2)					
106	近江八幡市勧学院田中堂	近江	古墳初頭		(E1)					
107	蒲生町田井	近江	古墳初頭		(F1)					
108	長浜市国友・寺田	近江	古墳初頭		B2					

町国領遺跡は２分割である。

以上のように中期後半から後期前半における住居内高床部の様相は、播磨、摂津、丹波、紀伊、近江などで散発的にみられるのみであり、東部瀬戸内地域の一様相にすぎない。その機能を形態から類推するに、「分割ベット」といわれる寝台的機能を重視したものや高床部が馬蹄形にみられる屋内区分の反映を重視したものや高床部のはばの狭い棚的な機能がうかがえるものにわけられる。

後期中葉以降から庄内併行期は屋内高床部を持つ住居の盛行期ともいうべき時期であり、播磨地域を中心に畿内一円に高床部を持つ住居がひろがる時期である。屋内高床部は後期中葉以降、多角形住居にも採用され、何割かの割合でセットとしてみることができる。

とくに西脇市大垣内遺跡[注22]や赤穂市周世入相遺跡[注23]では、平面プランは不整円形や不整方形であるが、高床部の形態が主柱に規制された多角形をなす住居がある。これは、比較的シンメトリーな平面プランをもつ多角形住居の成立ちが屋内利用区分の反映と密接に関連しているものと見ることもできる。さらに多角形住居自体が従来いわれているとおり[注24]、共同集会所といった集落の中心的存在とすれば、屋内利用区分の反映になんらかの象徴的な意味があるとかんがえることもできるであろう。

屋内高床部はまた長方形プランの住居にも採用されており、多角形住居と同じように播磨から摂津・山城を分布域とする。この類型の住居はまた播磨大中遺跡で注目されたようにいわゆる室岡型の住居(長方形の２本柱で両短辺に高床部を設置する形態)もふくむ。ただ多角形住居のように性格を規定できる要因はおおくない。

円形と隅丸方形・方形プランの住居については、前代以来の棚的な機能の高床部や「分割ベット」といわれる寝台的な機能のものは少なくなり、円・方Ｆ１型式に代表される屋内区分を反映したものが圧倒的に多くなる。

５．屋内高床部という属性について

屋内高床部の盛行期(弥生時代後期中葉～古墳時代前期)の集落における設置形態の多様性をみていくと、集落ごとに差異がある。たとえば、播磨町大中遺跡や三田市川除・藤ノ木遺跡などのように多くの型式をもつ集落は特殊なほうであり、大部分は１型式しか持たない集落が多い。またそこに表出された型式についてもかなり偏差がある。そこで、近畿地方全体における集落間の差違傾向を読みとるため、盛行期の高床部の設置型式を旧国単位で集計してみた。

数量的には、方Ｆ１(方Ｆ１とは、方形住居のＦ１類型を示す)が圧倒的に多く、次いで方Ｅ１、方Ｅ３、円Ｆ１などがおおい。加えてこれらは、比較的広範囲になる傾向がある。なかでも方Ｆ１型式は、23の集落において検出されており、資料数の約２割をしめる。また旧国単位では播磨・摂津が圧倒的に多く、両地域とも多くの型式からなるところから、多様性のある設置形態をみることができる。ついで紀伊、河内、和泉、山城、丹波、近江などの国がつづく。

付表２・３に見るように、弥生時代後期中葉から古墳時代前期にかけては、高床部が設置される住居が円形から多角形住居まですべての平面プランの住居にひろがるわけであるが、その分布域については、畿内のなかでもかたよりがあるように思われる。芥川遺跡の報告にもあるように、多角形住居の分布域の中でも屋内高床部をもつ住居は、播磨・摂津・山城に分布域が限られてくるようであるし、長方形プランのものも、その傾向を同じ

付表２　屋内高床部旧国単位集計表(1)

	円形								方形および隅丸方形																				計
旧国名	A1	C1	B1	D1	D2	E1	F1	F2	A1	A2	A3	B1	B2	C1	C2	C3	D2	D3	D4	D5	E1	E2	E3	E4	E5	E6	E7	E8	F1	F2	
播磨	1				1	3	5	1			1	1				1				2	2	2	2						12	1	35
摂津	2		2	1			1		1			3		1	2	1	2				3		2		1			1	3	1	27
淡路							1																								1
河内												1							1		1		1						2		6
和泉						1											1		2		1		1						1		7
山城					1									1									3						2		7
丹波				1						1				1												1	1				5
丹後																		1													1
大和																													1		1
紀伊		1				1	1											1			2		2						1		9
近江					1								3																		4
計	3	1	2	2	3	5	8	1	1	1	1	5	3	3	2	2	3	2	3	2	9	2	11	1	1	1	1	1	22	2	102

付表３　屋内高床部旧国単位集計表(2)

旧国名	長方形						五角形		六角形			七角形		八角形		計
	B1	C1	D1	D2	E1	F1	E3	F1	B1	E1	F1	F1		E1		
播磨		1	2	1		1	1	3		2	1			1		13
摂津	2		1		1						1	1				6
淡路																
河内																
和泉																
山城									1							1
丹波																
丹後																
大和																
紀伊																
近江																
計	2	1	3	1	1	1	1	3	1	2	2	1		1		20

くする。一方で、円形、方形プランの高床部をもつ住居の広がりは、近畿一円にみられるが、播磨・摂津が圧倒的に多い。この点は屋内高床部という属性が、竪穴式住居跡の平面プランの相違を越えて強い地域性を示すものと言えよう。

また円形、隅丸方形、方形住居の高床部の設置形態に注目すると、分布の中心地域である播磨・摂津においてすべての型式を表出していないことが認められる。これらには、円Ｃ１・方Ａ２・Ｂ２・Ｄ３・Ｄ４・Ｅ４・Ｅ６・Ｅ７の型式があり、河内、和泉、近江、紀伊、丹波、丹後の地域において少数例みられるものである。加えて近江地域には、大津市滋賀里遺跡や近江八幡市勧学院田中堂遺跡・蒲生町田井遺跡のように、住居の内区の部分に高床部を設定するものもみられる。

この状況を総括すると、屋内高床部をもつ多角形・長方形および円形・隅丸方形・方形の竪穴式住居を含む集落が多い中心地域(播磨・摂津)と屋内高床部をもつ円形・隅丸方形・方形の竪穴式住居をもつ集落の少ない周辺地域(河内・和泉・近江・紀伊・丹波・丹後)に明瞭に分れるように思える。またその周辺地域の隅丸方形・方形住居の高床部の設置形態に個性がみられるという状況をみてとることもできる。

６．おわりに

以上のように弥生時代後期中葉から古墳時代前期の屋内高床部は、屋内区分を反映したと思われる設置形態が、播磨・摂津地域を中心に近畿地方一円に広がり、それがその周辺地域においては、個性的な設置形態を示す住居が生れたといえる。そして、屋内高床部という属性が多角形住居の分布の点からしめされたように、その住居の平面形態と相関するものでないということもできる。さらに、近畿地方において、住居全体の中で屋内高床部をもつ住居の比率が低いと思われる点も考えると[注25]、そこでは、笹森氏の提示した集落内における個別住居の類別概念をみるよりも、集落間の関係が近畿地方の屋内高床部の存在理由および設置状況に大きく影響していたのであろう。

今後はその集落間の関係解明と屋内高床部をもつ住居の集落内における位置付けを考えることが課題である。また、今回検討したのは瀬戸内東部の近畿地方のみであり、今後はよりマクロな視点でみる必要があろう。

（きしおか・たかひで＝兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所）

注１　西岡誠司「屋内高床部に関する一試論」『網干先生華甲記念―考古論集―』　1987

注２　寺井誠「竪穴住居からみた古墳出現前後の社会」『古文化談叢33』　1994

注３　関晴彦「住居跡の構造」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書ＸＩＸ』　福岡県教育委員会

注４　「吉野ヶ里遺跡―神崎工業団地計画に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書」（『佐賀県文化財調査報告書　第113集』　佐賀県教育委員会）　1992

注５　松下勝『播磨をめぐる弥生文化』　松下勝氏追悼著作集刊行会　1993

注６　熊野正也「弥生時代集落構造の一考察―ベット状遺構をもつ住居址を中心として―」『史館』第２号　1974　市川ジャーナル社

注７　沢田大多郎「古墳発生時における社会」『考古学研究』第53号　考古学研究会　1967

注８　河野眞一郎「初期農耕集落の解明」『Circum-pacific-1』　1975

注９　石野博信「考古学から見た古代日本の住居」（『日本古代文化の探求・家』　社会思想社）1975

注10　注３に同じ。

注11　『播磨大中遺跡の研究』　播磨町教育委員会　1990

注12　笹森健一「竪穴住居の使い方」(『古墳時代の研究２　集落と豪族居館』　雄山閣）1990

注13　笹森氏は、均一的な住居形態でかつ住居方位も同一であるため、高床部の設置形態により、個別住居が類別されていたのではないかとの考えを示している。

注14　提示資料以外にも、小野市王子山ノ下遺跡、小野市金鑵城遺跡、小野市舟木高町遺跡、垂水区大歳山遺跡、神戸市北区上山遺跡、千種町河呂大森遺跡、加西市村前遺跡、加古川市北在家遺跡、龍野市清水遺跡、尼崎市田能高田遺跡、豊中市勝部遺跡、池田市池田城跡、池田市豊島遺跡、茨木市培賀遺跡、日置川町安宅遺跡、で屋内高床部をもつ住居が検出されている。以上は、未報告資料であるが、概要報告のため詳細に報告されていない資料のため、今回は考察対象から除外した。なお、上記資料作成にあたっては、兵庫県埋蔵文化財事務所甲斐昭光氏、枚方市教育委員会西田敏秀氏、野洲町教育委員会杉本源造氏、和歌山市埋蔵文化財センター土井孝之氏、羽曳野市教育委員会河内浩一氏、大阪府教育委員会山田隆一氏の作成資料を参考とさせて頂いた。なお、参考文献については割愛させて頂いた。

注15　注６に同じ。

注16　注８に同じ。

注17　注１に同じ。

注18　注２に同じ。

注19　杉本源造「滋賀県内の竪穴住居内の高床部について」『滋賀考古』12　滋賀考古学研究会　1994

注20　塩壺遺跡については山下、多賀両氏にご教示頂いた。

注21　河内浩一36和歌山県西田井遺跡『日本考古学年報』39　(1986年度版)

注22　『西脇市大垣内遺跡』(兵庫県文化財調査報告書第98冊　兵庫県教育委員会）1991

注23　『赤穂市周世入相』(兵庫県文化財調査報告書第98冊　兵庫県教育委員会）1991

注24　いわゆる多角形住居についても、その多くが高床部を有するところから、屋内高床部をもつ住居の一類型として把握する必要があろう。これまでは、播磨大中遺跡、赤穂市周世入相遺跡、西脇市大垣内遺跡の報告等に一定の見解がみられたが、近年の芥川遺跡の報告では、その分布域が漠然としか把握されていなかった多角形住居の集成がおこなわれている。すなわち「多角形住居は本来瀬戸内東部を中心に営まれ、弥生時代後期に瀬戸内東端と淀川流域に伝播したものと考えられている。また多角形住居では出土遺物にしばしば得意なものがあり、多くは床面積が50㎡を越え、集落の中心的存在と考えるにふさわしいものがある」とし、多角形住居の分布・傾向・意義に一定の解釈をあたえている。

『芥川遺跡発掘調査報告書』(高槻市文化財調査報告書第18冊　高槻市教育委員会）1995

注25　竪穴式住居跡の同時存在を証明するのは困難な面が多いため、現存の資料から、一定の時期幅の住居群のうち屋内高床部をもつ住居の比率を算出してみると、西脇市大垣内遺跡や播磨町大中遺跡さらに三田市川除・藤ノ木遺跡の一時期で50％以上の高い比率を示すが、摂津・播磨以

外の地域ではそれほど高い比率を示す遺跡も少なく、また川除・藤ノ木にみるように比較的高い比率をしめる集落でもおそらくそれは一時期のことであろうから、屋内高床部をもつ住居の割合は、一般的には低いとおもわれる。

謝辞

なお以下の方々には資料収集や多くの点で御教授頂いた。記して感謝を表したい(順不動、敬称略)。

杉本源造、山下史朗、中村弘、多賀茂治、木下保明、長宗繁一、吉崎伸、高橋潔、出口勲、石井清司、西岡誠司、中川渉、禰宜田佳男、森島康雄、岡本敏行、吉田昇、長浜誠司、黒石哲夫、土井孝之、河内浩一、濱田延充、積山洋、大野薫、安村俊史、土橋誠、寺井誠、高橋潔、杉本厚典、中島皆夫、國下多美樹、岩松保、山田隆一、岩崎誠、藤井望、鐵英記、山田清朝、濱野俊一、尾関真二、亀田学、有井広幸、石野博信、菅原正明、枡本哲、柴暁彦、田中史生